

さて、以上のような学習を通じて、人間はその性格を形成するとして学校はどの学習のタイプを意図的な教育活動において実現しうるか、といえはそれはおしまいの二つである。「授業とは、子どもを追いかんていくことである。どうしても、いやでもその問題につきあたり、つき破っていかざるをえないような、未知の力を発揮せざるをえないような、のびきならない断崖へ子どもを追いかんていく。そのために教師はたえず子どもをゆさぶっていかねければならない」(武田常夫)といわれる。いつも明確に問題を提示し、問題があるために対立とか葛藤とかが生れ、あるいは衝撃をあたえ驚きを惹起する。それが子どもたちの内面に緊張や集中をよびおこし、あたらしい発見や追求のエネルギーを生む。そして今という問題には、だれがその教材を読んでもほとんど同じように意識されるものもあるし、ときにはまったく、その人ではなければ発見できないような一見何でもないと思えるところにかくされている、だれでもが見すごしてしまうような目立たないところに発見され把握される問題もある。後者は教師の創造力やイメージにかかわるものであり、教師の仕事のなかで、もっとも困難なしかもっとも力感あふれる仕事とされるものである。ところどころでいうまでもなく、授業における対立は、対立した考えのどちらかに軍配をあげることに目的があるのではない。それを媒介としながら、子どもの新鮮な思考や感情を生みだすところにねらいがある。「そういうものを生みだしたとき、はじめて、それは価値ある対立とよべる」(同上)のである。これはすでにおしまいの学習の領域に入るものである。それはある絵の授業において具体

的にみられた。

その授業では、子どもの現実に即して、図画教育のもっとも本質的なことを明快に、かつ具体的に指導されており、一人ひとりの子どもの事実をみのがさないで的確な指導がおこなわれた。さらに「他の子どもとつなげる」ということも意図しておこなわれ、子どもたちどうしの影響のしあいが見られた。この授業では、教師の日常の身ぶり、手ぶりが子どもたちに影響し、教師の人間性が大きく働き、技術的なこと以上に、人間と人間の交流があり、子どもたちと物との交流があった。教師の人間としてのはずみがあり、子どもたちを人間全体として生き生きと動かしていたのである。まさに、「単なる美術教育をこえた教育」であった。

このような教育こそ、学校において実現しうる、性格形成の教育であり、それはいつでも教材を媒介としているのであり、教室を離れて存在するものではない、といえる。

元朝の仏教政策

本学講師 藤 島 建 樹

元の時代の仏教界の様相を伝える史料、ことに仏教側によって編纂された史料は、元朝治下の僧徒が、国家またはそれに代る機関や高官の招請のもとに各寺院に入寺した事実が非常に多いことを伝えている。このような現象は一見、仏教に対する保護と考え

得るし、事実、元朝崇仏の一要素と考えられてきた。しかし、すでに学識と名声を得て自らの基盤とする寺院をもつ僧徒を国家の命令で移籍させることが保護・尊崇であるといえるであろうか。観点を変えれば有力な僧徒を国家の統制のもとに配置し、管理したともいえるのではなからうか。さらに言を換えれば、元朝は仏教に対する崇敬の念だけでなく、一方では仏教界に対し為政者・支配者としての視点もゆるがせにはしなかったのではなからうか。このような観点にたつて世祖の仏教対策を再検討した時、まず注目に価するのは、江南に対する「釈教総統所」の設置であろう。それは僧司の整備を目的とした世祖の発案であったというが、その設置が臨安陥落の翌年、すなわち南宋滅亡が決定的となった至元十四年であること。設置された場所が、すくなくとも江淮・江浙・福広、いわゆる中国伝統仏教のさかんな江南地域であること。その長官として派遣されたのがラマ僧である楊璉真伽・亢吉祥・沙囉巴らであったことを考慮すれば、この処置は征服者元朝の江南收拾策の一環であったと見るのが妥当ではなからうか。ことに異質の仏教を信奉し、江南事情にうといラマ僧を派遣したことはたんなる慰撫工作ではなくよりきびしい統治態勢を感じしめずにはおかぬ。

戦後の混乱が一段落すると江淮には三十六ヶ所の御講所が設置される。これは既成寺院を選び、指名した有力僧を配置し、經典の講義を主とする布教活動を行わしめたものであるが、これを推進したのは釈教総統所であったと考え得る。この処置もまた寺院を保護し、僧徒を安定させ、布教の場を提供することから見れば、

ば、仏教護持の態度を宣明にしたものといえようが、つねに寺院と有力僧を把握し、布教活動を促すことによって民意の平定をはかることもできたきわめて巧妙な行政的措置と見ることもできる。

こうして江南仏教界が安定し、行政的基礎が固まると釈教総統所の使命は終わる。一つには、楊璉真伽の宋陵発掘に代表される暴挙と、沙囉巴の意志不疎通に見られる如きラマ僧の存在から生ずる軋轢であり、二つには宣政院が設置された仏教統領のための行政官署として登場していたこと、加えてこの一連の政策の積極的推進者であった世祖の死などが、過渡的処置であった釈教総統所の存在の場所を失わしめた結果であろう。

しかしこうした釈教総統所設置にはじまる世祖の江南仏教界への対処を見ると、表面的な仏教優遇政策の裏面に、きびしい為政者としての配慮・行政的統制が隠されていたことを知り得よう。このようなきびしい態度は世祖以後継承されることなく、宣政院は仏教優遇機関となり、仏事に巨額を費し、ラマ僧の横暴に寛容な崇仏国家「元朝」となるが、有力僧の各寺院への配置という点では以後も継承されたことは史料に明らかである。僧の伝の中に、招請されたが赴任しなかった、または辞退したと記すものも若干ある。あるいはそれがこのような権力的・行政的処置に対する僧徒たちのせめてもの抵抗を物語っているのではなからうか。

征服王朝の先端を行った遼は、漢人仏教を採用し、一代にわたって崇仏政策を敢行した仏教王国であり、仏教を支配者契丹人と被支配者漢人を結ぶ紐帯としたといわれる。しかしそれによって

漢化作用、すなわち征服王朝としてもっとも注意しなければならぬ漢化現象を促進し滅亡の因としてしまった。それを見た金は、一方では仏教を客観的に眺め行政的に扱い、他方、個人としては尊崇し、保護を加えるという二面的な扱いをしたという。そこには明白に遼に対する批判と新しい工夫がなされているといえよう。さらにそれを受けた元、すくなくともその建国者で世祖は、金の方式に則しつつも、自らの信仰は漢人仏教とは異質なラマ教に求め、中国仏教に対しては統治者としての配慮を怠らなかつたのである。こうした仏教に対する処し方から見ても征服王朝の波は次々に受けつがれさらに高められていったことを知ることができる。(なお、本論の詳細は拙稿「元朝における政治と仏教」(『大谷大学研究年報』第二十七集所収)第一章を参照されたい)

(丁)

唐代古文運動の一背景

本学講師 河内 昭 円

韓愈と柳宗元の二家は、中唐におこった古文運動の大家としてつとによく知られている。彼等とともに、修辭に腐心して形式に拘泥する六朝の駢文を斥け、実用達意の西漢以前の文章、すなわち古文への回帰を提唱したのであった。その主張と作品は、そのち今世紀の初頭に至るまで文章家の規範となったが、韓・柳が

志向するところはもとより単なる古文の模倣にあつたのではない。文学を通して道を求め、道を明らかにしようとしたところに深意があるのであって、古来多くの人々がこの点に注目してきたのである。韓愈は「然ると雖も愈の古文を為るは、豈に独り其の句読の今に類せざる者を取るのみならんや。古人を思ひて見るを得ず。古道を学べば則ち其の辭に兼ね通ぜんと欲す。其の辭に通ずる者は、本より古道に志す者なり。」(韓昌黎集卷二二 題歐陽生哀辭後)といい、柳宗元は「始め吾れ幼にして且つ少とき、文章を為るに辭を以て工と為す。長ずるに及んで、乃ち文は以て道を明かすを知れり。是れ固に苟しくも炳炳烺烺たるを為して、采色を務め声音に誇りて、以て能と為さざるなり。」(柳河東集卷三四 答韋中立論師道書)と述べている。

この卓越した文学観のもとに、当時多くの文人が彼等を慕って集まつた。韓愈は朋党の禍を懼れて師弟の關係を忌避する当時の風潮に敢然と立ち向い、「師の説」を発表してすんで師の必要性を説いた。かくして彼の門下には「唐書」の韓愈伝に附伝される孟郊・賈島・劉叉・張籍・皇甫湜をはじめ、李翱・李漢などの多数の英俊が輩出した。柳宗元は「往に京都に在りて、後学の士の僕の門に到るもの、日に或は数十人なり。」(柳河東集卷三四、報袁君陳秀才避師名書)と長安時代の様子を述べているものの、生涯の途中で朝廷に罪を得てのち不遇に終つたことも相俟つて、韓愈ほどには積極的な指導性を發揮しなかった。しかし左遷された任地にも彼を欽慕する若者の跡が絶えなかった。「柳河東集」にはそういった人たちに与えた詩文が多く収録されている。